

華人女性作家の自伝的作品における アイデンティティ・ポリテクス ——徳齡『童年回憶録 (Kowtow)』を読む

阿部 沙織

はじめに

昨今、米国研究界発の華語語系文学 (Sinophon、サイノフォン) という概念が、「華語」を媒介に世界各地の異なる民族・地域・国家における文学的営為を結び付け、これまでの「中国文学」の境界線を吹き揺らしているようである。華語語系文学の一角を占めるディアスポラ文学について、「純文学雑誌」として2011年から2014年にかけて香港・現代伝播社より中国大陸において隔月で発行された『天南』の第5期(2011年)は、「離散之味 (The Diaspora)」をテーマとし複数の中国国外作家の小説・エッセイと、かれらについての評論を掲載している。その中で、自身も長く英国に逗留していた作家の虹影は「故郷・他郷と女性意識」と題した記事を寄せ、興味深い現象を指摘している。

明らかな事実として、海外の中国人作家の中で女性が占める割合は男性をはるかに上回っている。(中略)

海外で展開される中国文学の本質的な特徴として、えてして女性が中国文化の海外における伝承の責任を負っている。それは母語文化だけでなく、文化的母性という伝統の継承であり、「臍の緒で繋がる」ことが中国文化の「離散 (Diaspora)」状態にあつての主な維持方法なのである¹⁾。

このように虹影は海外において英語で創作する「中国系」作家の中でも特に女性作家の果たす役割が大きいことを指摘し、これら女性作家を中国語圏から海外へ居を移した「僑居作家」と移民二世として海外で出生した「華裔作家」に分け、それぞれの作品やテーマについて紹介と分析を加えている。「僑居作家」として挙げるのは張愛玲、包柏漪 (Bette Bao Lord)、閔安琪 (Anchee Min)、王屏 (Ping Wang) のほか、伝記作家の鄭念、張戎、張邦梅 (Pang-Mei Natasha Chang) など主に20世紀後半に活躍した作家たちであるが²⁾、虹影は彼女らの「開祖」として1911年から英語で作品発表を始めた元西太后付き女官、徳齡の存在を強調している。曰く「昨今、回想録は非常に増えている。一読するといずれも徳齡公主が転生したかのように見えるが、精彩さは遠く彼女の著作に及ばない。いま徳齡公主を知る人は多くないが、彼女のモデルは確かに西洋人をひきつけることに長けていた——満族貴族の令嬢が宮廷女官となり中国の激変を目撃する、というモデルだ」³⁾。

日本においては、徳齡の著書の大半が過去に邦訳されている一方、現在注目されることは少なく、徳齡を対象とする日本語の論考も管見の限りでは見つけることができなかつた⁴⁾。冒頭で述べたように、既成の「中国文学」の境界や概念を再考する動きがある昨今、中国出身の女性として初めて英語で創作を行ったとされる徳齡とその著作について再検討することで、越境して行われる文学的

営為を検討する上での一つの参照軸が得られるのではないだろうか。本稿ではこのような問題意識を起点に、徳齡の自伝『童年回憶録 (Kowtow)』に焦点をあて、「華人女性作家の開祖」となった徳齡がどのように海外において自らを語ったのか、そこにはどのような東西・民族・性別・階級をめぐるアイデンティティ・ポリティクスが存在したのかを考えたい。

一、徳齡とその著作について

徳齡は 1881～6 年⁵⁾ 生まれ、父は正白旗漢軍旗人で駐日公使や駐仏公使などを歴任した裕庚、母は中国人の母と米国人の父を持つ Louisa Pearson⁶⁾ である。幼少期から父の任地である湖北省沙市・漢口、北京、東京、パリと各地を転々とし、1903 年に帰国すると海外経験や英・仏語の能力を買われ妹容齡とともに西太后の私的な女官兼通訳として 2 年間召し抱えられた。父の病状悪化に際して宮中を辞した後、1907 年上海で米国駐中国副領事のタデウス・ホワイトと結婚、1911 年 7 月に初の著作となる *Two Years in the Forbidden City* を “Princess Der Ling” 名義 (徳齡と清朝皇室に血縁関係はない。西太后が自らの喜寿に際して、本来は親王の娘の称号である「郡主」の肩書を徳齡に叙勲した⁷⁾ ものを、Princess と英訳したようである) で上海にて出版する。宮中で過ごした 2 年間を詳述した同書は発表後まもなく辜鴻銘が書評を著し激賞した⁸⁾ ほか、辛亥革命により世界が中国情勢に注目する中、欧米圏では中国研究者の必読書になったという。1914 年には『清宮二年記』として漢訳されている。日本でも 1915 年には抄訳が出ており、同書の影響力が窺われる⁹⁾。徳齡はこの勢いに乗り、*Old Buddha* (1928) *Kowtow* (1929) *Lotos Petals* (1930) *Jades and Dragons* (1932) *Golden Phoenix* (1932) *Imperial Incense* (1933) *Son of Heaven* (1935)¹⁰⁾ を著す。1926 年前後には上海の蘭心大戲院で自ら西太后に扮し話劇を演じるなど華やかに活躍する時期もあったが、その後の人生は愛息の事故死や離婚を経験し決して平坦ではなかったようである。日中戦争中は米国で中国支援活動に参加したが、1944 年に交通事故により志半ばにしてこの世を去った。1940 年に徳齡が米国で出演した「フォックス・ムービー・ニュース」を現在 YouTube でも視聴することができるが、清朝の宮廷服に身を包み流暢な英語で米国民に中華民国への理解を呼び掛ける姿は新旧と東西を一身に体現する徳齡の人物像をありありと今に伝えている。

このように特異な女性、「華人女性作家の開祖」が誕生するにはどのような背景があったのだろうか。徳齡の作品といえは「清朝宮廷もの」ともいふべき西太后の身辺での見聞録が代表作であり、21 世紀以降、徳齡を題材としたテレビドラマ、長編小説¹¹⁾ が創作されているのもその経験が稀有なものであるがゆえだろう。また、現代中国の大衆文化における「清朝宮廷もの」ブームとも無縁ではないのだろう。が、先に述べたように、本稿ではこれら宮廷での日々を叙述した作品ではなく、徳齡の少女時代の回想録『童年回憶録 (Kowtow)』を取り上げたい。

二、『童年回憶録 (Kowtow)』について

Kowtow は 1929 年に米ニューヨークの老舗出版社 Dodd, Mead and Company から発行された。徳齡三作目の著作となるが、西太后を始めとする宮廷内の人物やそこで繰り広げられる人間模様、ま

た宮中の行事やしきたり、建築物や装飾品などを細かに描写した前二作とは異なり、本作では最初から最後まで徳齡の生まれ育った家庭を主な舞台として、父親の任地である湖北省沙市、漢口、北京、東京、パリと居を移す中で徳齡の経験する出来事が一人称で述懐される。徳齡の「自伝」と考えて良いだろう。漢訳は1948年に顧秋心が『童年回憶録』として上梓している¹²⁾。

同作は全35章、1章は10頁前後のボリュームで徳齡6歳から20歳前後までの出来事が回想される。英語原版と中国語版の目次を以下に引用するとともに、各章の内容を簡単に紹介する。

Kowtow 目次

1 MEMORIES OF SHA-SSU (回憶中的沙市)	徳齡6歳、活発で頑固な子どもで父に溺愛される。古典の勉強には意味を見出せず教師と敵対する。
2 THE SOLEMN COURTYARD (嚴肅的庭院)	纏足をしていないこと、満族であることを自覚。
3 THE FOREIGN-DEVIL DOLL (害人的洋娃娃)	外国に偏見のある使用人との対立。
4 THROUGH THE TEAKWOOD PANELS (從屏門望進去)	衝立の裏で父の仕事ぶり、叩頭などの儀礼を盗み見る。
5 THOSE TERRIBLE MANCHUS (那些滿洲人)	漢族と満族の対立、満族の歴史について父との対話。
6 GREEN BROADCLOTH (綠絨幃)	宣教師保護のため無錫へ向かう父に同行する。一品官の印である緑の垂れ幕が誇らしい。
7 GOOD-BY TO SHA-SSU (別了, 沙市)	父の武昌赴任にともない沙市を去る。
8 ARGOSIES OF THE MIGHTY (運河航行見聞)	屋形船で1週間かけて武昌へ。
9 YAMEN WALLS (衙門的圍牆)	父の任地武昌の屋敷での出来事。
10 FOREIGN-DEVIL EDUCATION (洋鬼子的教育)	西洋式教育に対する周囲の偏見。
11 PULSE OF THE EMPIRE (太后的寿礼)	西太后の誕生日の贈り物に張之洞は機械仕掛けの時計を選ぶ。
12 WAR CLOUDS (战争的陰霾)	日清戦争開戦の折、西太后への謁見のため一家で北京を目指す。
14 THROUGH "CHI WHA MEN" (父親請客)	徳齡9歳、北京に到着。〔漢訳題は内容と齟齬あり、誤訳? "CHI WHA MEN" は齊化門〕
13 AN AUDIENCE WITH PRINCE KUNG (恭王府里的集会)	父の友人恭親王との交流。
15 CONFLICT (政見的冲突)	父の日本への任官が決まる。
16 OFFICIAL GRANDEUR (官場的尊榮)	徳齡10歳、日本への船旅、使用人たちの外国への恐れ。
17 "CHAN CHAN BO ZU" (光頭辮子)	神戸・東京間の汽車の旅で日本の庶民の好奇の目に晒される。
18 LEGATION ECHOES (破落的使館)	日清戦争後荒廃した公使館、日中交流のため再建を決意する父。
19 BEDLAM (語言隔膜的笑話)	言葉の壁により支障をきたす公使館の修繕や日常生活。
20 THE LEGATION OPENING (使館生活的開始)	各国公使が公使館を訪問する。
21 SIGNALS OF DECORUM (礼儀之邦)	日中・中外の習慣の違いについて。
22 THE CHERRY BLOSSOM GARDEN PARTY (櫻花遊園會)	徳齡12歳、園遊会で明治天皇・皇后に謁見する。
23 FATHER ENTERTAINS (父親的宴会)	父が各国人をもてなす。
24 CHINA'S GREAT STATESMAN (中国的大官)	横浜に立ち寄った李鴻章をもてなす父。
25 CHINA "COOPERATION" (中国 "外交")	孫文の指名手配と、父に向けられる孫文隠匿容疑。
26 "FOREIGN" POLITENESS (外国礼節)	西洋人の西洋中心主義への批判。
27 MY PROUDEST MOMENT (最光荣的一刻)	土方伯爵と父の会見の通訳を担当する。
28 WISHES AND BIRTHDAYS (希望和生日)	父のフランス赴任が決まる。
29 ON TO PARIS! (到巴黎去)	パリへの長い船旅。
30 A NEW WORLD OPENS (新世界的展開)	パリでの生活。舞踊家イサドラ・ダンカンに師事。
31 WAR CLOUDS IN CHINA (戰雲籠罩了中国)	義和団事件の発生。
32 RUMORS, MESSAGES, BEDLAM (謠言、消息、瘋人)	父と、敵対する端王との確執。
33 THE KOWTOW (叩頭)	徳齡15歳。叩頭をめぐる2つのエピソード。
34 MY FATHER'S ILLNESS (父親的病)	帰国が決まり、公使館で徳齡主催のパーティーが開かれる。
35 FATHER AND I (父親与我)	帰国後西太后に仕えたこと、父の上海での死。



Kowtow 扉

徳齡の第一作で、現在最もよく知られている *Two Years in the Forbidden City* では、宮廷内のものごとの描写にかなりの紙幅が割かれている。中でも西太后の言行が詳述されていて回想録の中心を占める登場人物となっており、語り手の徳齡は目前の現象に対してその感じたところを簡単に述べるに留まっている。それと比べると、*Kowtow* においては語り手である徳齡とその父が中心的な人物となっており、語り手はかなり雄弁に自身の感情や思考を読者に吐露する。その意味でも、本作は「自伝」の要素の強い作品であり、第一作とは大いに作風が異なる。徳齡の著作の中で本作が邦訳されていないのも、そのような性質によるところが大きいのだろう。つまり、徳齡の著述に期待されているのは西太后に代表される神秘的な清朝宮廷のヴェールを剥がすことなのだ。本作で徳齡は第一作での「パリ帰りの美しく聡明で進歩的な宮廷女官」というような造型ではなく、好奇心旺盛で反抗心の強い少女として造型されてお

り、前二作とは異なる自画像を読者の前で描き出そうとしていることが窺われる。とはいえ、徳齡の著作については、“Princess Der Ling” という自称も含め、歴史的事実と合致しない点が数多く存在することが早くから指摘されている¹³⁾。先行研究においては徳齡が故意に“Princess”の誤訳とも言うべき「公主」を自称し清朝遺臣としてのアイデンティティを保とうとしたとも考察されている¹⁴⁾。本作についても虚実が入り混じっていることは明らかで、筆者は本書の内容全てを精査したわけではないが、現時点で分かり得る範囲で徳齡が回想録において「書いたこと／書かなかったこと（或いは事実を曲げたこと）」も確認し、徳齡のアイデンティティ・ポリティクスを読み解きたい。

ところで、徳齡の一連の著作について宋偉傑は次の三種の文学系譜に組み込むことができるとしている¹⁵⁾。第一に、吳趸人『恨海』李宝嘉『庚子国変弾詞』林紓『京華碧血録』などの「国是叙述」ものの系譜、第二に、故意に西太后を邪悪に描いたと辜鴻銘が批判した Bland Backhouse による *China under the Empress Dowager*¹⁶⁾ や、徳齡第一作にも登場するコンガー夫人による *Letters from China, with particular reference to the empress dowager and the women of China*¹⁷⁾、同じく徳齡第一作で西太后の肖像画を描いたと伝えられるカール女史による *With the Empress dowager*¹⁸⁾ など、外国人の手による西太后のルポルタージュの系譜、第三に Sui Sin Far (水仙花)、Virginia Lee (李金蘭)、Jade Snow Wong (黄玉雪)、Mai-mai Sze (施蘊珍) 等のアジア系アメリカ文学、漂泊する女性による個人的体験の叙事の系譜である。

このように異なる系譜の中に本作を置くことができるのも、徳齡自身の多義的な立場のためであろう。本作には満族と漢族、男と女、西洋と中国、主君と臣下など、異なる属性・価値観を持つ人々あるいはグループの対立と交渉が多く描かれている。そして徳齡自身が中国人でありながら西洋で教育を受けるなど、複数の属性や価値観を内包しており、対立や交渉の渦中に身を置かれていた。「徳齡の著作において、満族／漢人あるいは文明／未開の二項対立は、近くからと遠くからの魅力的な視点を通して、人種、民族、性別、言語、文化の曖昧な境界線を飛び越えて検討されている¹⁹⁾」と宋偉傑が指摘するように、徳齡の越境によって、本作においては本来二項対立する概念がその他の要素と複雑に絡み合っ提示されている。徳齡の「ねじれ」を見せるアイデンティティを、以下

に性別、民族、地域、階級などの側面から見て行きたい。

三、徳齡のジェンダー・アイデンティティ

前に見たように、本作は徳齡6歳の記憶から書き起こされ、宮仕えを経て20歳前後で父親を亡くすまでの歳月を回想している。最終章である第35章「父とわたし」では「これが最後の章となる。悲しむべきことのはずだが、決してそうではない。なぜならわたしはこの最終章で父裕庚の無上なる高貴さを示したいからだ。彼の最後の懸念はやはりわたしについてのものだった²⁰⁾」と叙述者としての肉声を吐露しながら、父親がいかに最期まで娘徳齡の最大にして最良の理解者であったかを描いている。

前章では徳齡の著作が様々な文学系譜に収められる特徴を有しているという指摘を引用したが、本作には徳齡のフェミニズム的とも言える女性意識が表出しており、前出の三分類であれば最後の在外華人女性の叙事の系譜に置いてこれを読みたいと筆者は考える。本作では、徳齡が幼少より「女子であるため」に受けた制限や、女子が忌みの対象となる旧習が数多く述べられる。例えば第6章では外に干してある女性の衣類の下を駕籠がくぐるのは不吉であるという迷信があるため、駕籠が通る前に従者が衣類を取り除く様子が描かれるし、第8章では砲艦に女性が乗船するのは禁忌であることを知らずに徳齡が足を踏み入れてしまうエピソードが述べられる。第1章でこの自伝に登場する6歳の徳齡は欧州から帰国したばかりの「頑固で、甘やかされた、わがままな子」で、中国式教育を受け始めるも、厳格な家庭教師の鞭を奪って逆に教師を打ってしまうほどの放埒ぶりである。しかし彼女は徐々に上に述べたような迷信や旧習に晒され、スティグマを刻まれる。その時に徳齡を不当な扱いや屈辱から救い出すのは父親である。

第8章では、沙市から武昌に向かう船旅の途中、徳齡が停泊している砲艦に好奇心から飛び乗る。女子が禁忌を破って乗艦したことに戸惑う艦長に対し、父親は「そのような〔乗艦〕制限はよその女や小さい娘に対しては、あるいは正しいことなのかもしれない」「しかし私の娘に対してそれを行えば、そなたたちにとって必ず不利になろう。この子が我が娘だからではない。この子は普通の女や小娘とは違っているからだ」と述べる²¹⁾。

また第10章では、当時女子が中国の学問だけでなく西洋の学問まで学ぶとなると、保守的な人々からの厳しい批判を招いたこと、その一方で父が徳齡たちの教育に熱心だったことが述べられる。「わたしの父が子女を教育するため闘いつづけたことは、彼の偉大さを証明している。少なくともわたしはそう考える。中国では女子はかわいらしく貞淑でさえあればよく、料理と裁縫に長けた良妻賢母として姑の忠実な奴隷になるのがふつうであった²²⁾」「いま、わたしは父がわたしたち娘に期待を寄せ続けてくれたことが喜ばしくてならない。かれはわたしたちが「非凡であること」を望んだ²³⁾」。

また、父親は自由意志による結婚を支持し、蓄妾制には反対していた。ゆえに、本来ならば二品以上の官員は娘が14、5歳になると妃嬪候補として宮中に召し出さなければならなかったが、父親はこれを避けるため二人の娘の出生を登記しなかったと言う。同僚の張之洞が娘の参内は榮譽だと言うのに対し裕庚は述べる。

「私は蓄妾制には反対する、少なくとも私の娘のために。娘の片方が、あるいは両方が男の慰みものになるだなんて、その男が皇帝であろうと平民であろうと、そんな榮譽には全く興味がない。娘たちの将来については、他の計画がある。それに彼女らは自分自身の未来について考えを持つべきだとも思う²⁴⁾」。

本作ではこのように、徳齡の父がいかに彼女の女性であるがゆえ損なわれた自尊心や貶められた地位を補おうとしていたかが述べられている。この中で、父は先見性のある、進歩的人物として造型されているようでいて、結局のところ徳齡を溺愛しているだけであることもその言動から読み取れる。徳齡が周囲から女性に対する禁忌を解かれるのも、父の威光に依るものであり、一時的に封建的男権の代行者の位置に立つことで、女性としてのジェンダー・アイデンティティを回復するといういびつな現象が出現している。

四、満族／漢族——徳齡のエスニック・アイデンティティ

徳齡にとってスティグマとなるのは「女性であること」だけではない。満州族であることも時には彼女にアイデンティティの危機をもたらした。

第2章、庭で木登りをしていた幼い徳齡は父親を訪ねてきた客の二人が話す内容を耳にする。一人の男が徳齡の顔立ちが美しいと言うのを聞き得意になるが、もう一人が「顔立ちは美しいが、足が大きいのがな」と言い放ったので、徳齡は泣き出してしまふ。堪えきれず父親と訪問客が会見しているところへ押しかけると「あの人、わたしの足が大きいって言った。どういう意味なの？」と本人を前に告げ口をするのだが、父親は娘の非礼を叱ることもなければ、客に何かを言うこともなかった。ただ、徳齡を引き寄せると客にも聞こえる大きな声で言い聞かせる。

「おまえは、おまえの乳母が歩く時の様子を知っているだろう。みっともなくよろよろして、小さな足では体が支えられないようだ。これもあの者が漢人であるからだ。漢人の娘は小さい時から足をきつく縛ってだめにしてしまう。(中略)しかしおまえは、私の娘よ、満族の娘なのだ。満族は決して娘の足をくるんだりはしない。おまえの足は他の子どもと同じように小さく、かわいらしい。そしていつまでもそうやってかわいらしいままだ。おまえの足は自然のまま、傷つけられてはいないのだ²⁵⁾」

清末の不纏足運動は宣教師から始まり、その後洋務に関わった士大夫層に引き継がれ、康有為・梁啓超の変法運動に際して高まりを見せた²⁶⁾。徳齡の父の反纏足言説は満族としてのエスニック・アイデンティティと結びついたものであった。一方、漢人は纏足を審美・文明の象徴とし、纏足をしていない徳齡の足を野蛮の象徴としてまなざす。父は満族が漢人を統治していることを根拠に、纏足を行わない満族の文明こそが優位にあることを主張する。幼い少女の自尊心は父のこの言葉によって回復するが、その後も「大きい足」は何度も批評に晒され、徳齡の身体は満族と漢人のエスニック・アイデンティティが交錯しぶつかりあう場となる。

のちに義和団事件の混乱に乗じて、父裕庚と敵対する端王が、徳齡一家の北京の屋敷を焼き払う

というエピソードが述べられる。端王は裕庚が外国と密通している売国奴で、もはや満族ではなく漢人に成り下がったという言い分で屋敷を燃やしたのだと明かす。この時徳齡は以下のように父を弁護する。

読者の皆様に知っていただきたいのですが、漢人は満族を野蛮な侵略者と考えていますし、また満族にとっては、漢人と呼ばれるのは屈辱です。父には確かにたくさんの漢人の友人がいましたが、それは父が世界中の国に友人がいたためです。父は中国の未来は外国勢との関係を強化できるか否かにかかっていると固く信じていたがゆえです。この時父には既に満族と漢人の別はなく、みな「中国人」となる日に希望を託していたのです²⁷⁾。

満漢の対立はここに述べられているとおり、「外国」というもう一つの参照軸の前にはほどけて行く。しかしながら、他でもなくその外国で徳齡はまた新たなスティグマに苦しめられることとなる。

五、西洋／中国——徳齡のナショナル・アイデンティティ

第17章、父の駐日公使赴任に伴い日本に到着した徳齡一行は、神戸・東京間の汽車の旅で日本の庶民の好奇の目に晒される。日本語も分からない彼女らに日本人は「ちゃんちゃんぼうず」と侮蔑的な言葉をひっきりなしに投げかける。日清戦争直後の日本では中国人への蔑視感が強まっていた。ここでは既に満漢の区別も無く、徳齡は「中国人」であるがゆえ、またも言われなく貶められる憂き目に遭うのだった。その一方園遊会で日本の天皇皇后と言葉を交わす機会を得て、「強國の天皇・皇后と握手をした!」と喜びもする。たとえ日本人に蔑まれても、徳齡が幼児期を過ごした欧州に追いつこうとする「強國」日本、そして自らと同じく支配階級にある日本の人々は親しみと敬意の対象でさえあったことがここからは窺える。そもそも伝記執筆時には徳齡は既にアメリカ人と結婚し20数年を経ており、「米国市民」となっていたのだから、西側に好意的な叙述が現れるのは半ば当然とも言えよう。伝記執筆時点では彼女のナショナル・アイデンティティは「米国人」よりになっていたのではないか。それでは、少女時代の徳齡のナショナル・アイデンティティはいかなるものだったのか。ここには実はかなり複雑な問題が存在していたと筆者は考えている。

Two Years in the Forbidden City は、パリから帰国した徳齡が母・妹とともに宮中に参内する場面から始まる。徳齡姉妹が中国語を話せるのかどうか、宮女である慶親王の娘たちは徳齡付きの宦官に確認する。徳齡たちはこれを冗談かとさえ思い、外国語は何か国語か話せるが、もちろん中国語も話せると答え、宮女たちはそれに驚きを隠さなかったという。徳齡は「宮中にはこれほど無知な人もいるのかと驚いたものの、知識を得る機会が少ないためだろうと納得した」²⁸⁾。

徳齡は宮女たちの無知蒙昧をやや突き放して記しているが、このような誤解を生んだのは必ずしも徳齡たちがその時洋装をしていたことだけが原因ではなかったのではないか。同書の邦訳『素顔の西太后』にも掲載され²⁹⁾、よく知られた徳齡を始めとする女官が西太后を取り囲む写真がある。ここには徳齡の母親の姿があるが、その顔立ちは明らかに西洋人の特徴を有している。また、徳齡姉妹は宮中の大臣たちに「alien (夷人)」と陰で呼ばれていたとも記しているが³⁰⁾、それは西洋の血統を持つ徳齡母子の容貌に対する反応でもあったのではないか。父親を語る雄弁さに比べると、徳

齢はこと母親に関してはその筆が振るわない。西洋に対する中国の落伍を嘆く一方で、母親が西洋の血を引いていることに触れた様子はない。それには母親の出自が関係しているのかもしれない。裕庚夫人については妓女の出であるという指摘がある³¹⁾。それによれば、鄭孝胥 1895 年 7 月の日記に裕庚が妻を亡くし北京の妓女「鬼子六」を妾としたとある。「鬼子六」の父は西洋人、母は粵妓で英語が話せたという³²⁾。



by Yu Xunling, 1903, パブリックドメイン (著作権消滅済),
wikimedia commons より
左から瑾妃、容齡、西太后、徳齡、裕庚夫人、光緒皇后。

これが事実であるとすれば、蓄妾制を否定していた裕庚の言行が一致していなかったことになる。また、一夫一妻制の西洋社会においては中国の一夫多妻の封建家庭は理解されるものではなく、徳齡としても母が妾、かつ妓女であったことは秘匿しておきたい事実であったろう。

中国内においては満族と漢人の対立に晒され、それらを超越する「中国人」としてあることに希望を託すが、国外ではその「中国人」であるがゆえに侮辱を受け、日本やフランスなどの所謂「強国」の価値観に自身を一致させようとする。しかし、彼女が英語で西洋人に向けて自らを語る時、自らの持つ西洋のルーツは秘匿されなければならなかった。徳齡の自伝からは、越境によって自身のアイデンティティの危機を経験しながらも、時には「書く／書かない」の取捨選択をも行い自らの少女時代を再構築しようとする跡が読み取れる。

前に述べたように、本書の中で徳齡は女子に対する理不尽な制限や迷信を告発している。抑圧に対する反発は彼女が稀有な女性作家へ成長する原動力であったとも言えよう。しかし徳齡が想定していた「女子」のグループにはさらに「階級」のバイヤスがかかっていたことを指摘しておきたい。それは徳齡の使用人の女性たちへの描写から窺える。

「奥様」の威を借りて子どもたちを脅す女中の「紅芳」への嫌悪はそこかしこで語られるほか、16 章では徳齡一家に同行し日本に向かう途中装飾品を失くし、川岸にへたりこみ泣き騒ぐ女中の情けない姿³³⁾、船旅に際して使用人たちが外国人と同じ便所を使うことを恐れておまるを持参したことなど³⁴⁾が冷笑するかのよう突き放した筆致で述べられている。彼女らは同じ女性でありながら、決して徳齡と同じ側に立つことはできず、徳齡の侍従として明確に線引きがなされている。

おわりに

徳齡は小説 *Jades and Dragons* (1932)³⁵⁾ において、当時の中国社会で旧態依然とした生活を送る人々の醜態を描いたが、その中で中国の旧道徳への不満、ことに女性に対する抑圧への強烈な嫌悪感をぶちまけている。「わたしが最も嫌悪するのは中国の道徳を耳にすることだ³⁶⁾」と口火を切る

と、中国女性は男性と接触することを制限されていること、父親の決めた婚姻に従わねばならないこと、外国の教育は毒であるとされていること、女性が女性を監視し自由な行動を制限していることなどを挙げた上で「中国の若い女性は〔このような〕道德規範を一貫して遵守しているので、人生の本当の意味については赤子同様に無知である」と切り捨てる。ここでの徳齡はひとかどのフェミニストのようである。当時、五四の女性解放言説も知識層には広がり、新女性や摩登ガールが登場し、このような言説もすでに珍しいものではなかったかもしれない。しかし、ここまで見て来たように徳齡のジェンダー・アイデンティティは民族・国家・階級などの要素がからまりあった複雑なものであった。

最後に『童年回憶録 (Kowtow)』において最も印象的な場面を引いて、むすびに変えたい。タイトルでもある「叩頭」——オリエンタリズム的記号でもある作法——が本作中で取り上げられる場面はいくつかある。最初に、幼い徳齡が沙市で検察御史を務める父の執務室で衝立に隠れて来客と父のやり取りを観察する場面がある。客は会見の始まりにまず叩頭をし、父も返礼として同様に叩頭する。叙述者はここで顔をのぞかせこのように述べる。

西洋人はこのような礼節を理解できるだろうか。貴族出身の中国人であっても、古文書をひもとかなければ多くは理解できないだろう。これら多くの礼節には意味があり、書き留めれば一冊の本になるだろう。これらは長い年月を経て子々孫々と受け継がれ、今では人々はただ機械的にこれを演じるだけになっていて、その本当の意味は忘れてしまっている。(中略) [茶を啜りあれこれと雑談をしてからようやく本題に入るというやり方は] 時間の浪費だろうか? そうかもしれない。しかし六歳の子どもにとってこれを見物するのは実に楽しいことであった。(中略) ひとつひとつの用事の進められ方はなんと優雅で高尚であったことか³⁷⁾。

また、手記の終わりに近い第33章ではこの「叩頭」が章題として取り上げられ、印象的な場面が描かれる。

パリ滞在中、当時流行していた演劇 *Sweet Lavender*³⁸⁾ の脚本を入手した15歳の徳齡は、学校での上演を計画し、同級生の男子と主役を演じる。演技とは言え衆人環視のもとで男女が親しげに手を取りあう姿に、徳齡に招待された中国人の観客は途中で席を外すほど衝撃を受け、公使館秘書は「礼教に反するものだ」と苦言を呈す。

これに対し父親はこの秘書が徳齡の高潔な芸術(演劇)を愛する純粋な気持ちを侮辱したとして、叩頭を行い謝罪することを要求する。秘書は「子どもに対して叩頭するとは…」と不本意な様子で主人の命に従う。徳齡は父ほども年の離れた秘書の叩頭に身を固くして戸惑いつつも、「私はこのことを生涯忘れることはないだろう、それを促した父の考えとともに」「この事件は当時の中国人がいかに偏狭だったかを示している」と述べ、父の行動を肯定的に受け止めている³⁹⁾。

大の男が少女に叩頭するという場面はそれだけで非常にドラマティックであるが、これは同時に旧弊な清朝官吏の西洋近代文明への屈服の姿とも取れよう。また女性と男性、子どもと大人、大清帝国と西洋の権力関係が顛覆する瞬間でもある。徳齡は、抑圧されるばかりであった女子としての自分がついに、礼教を象徴する人物を屈服させた忘れがたい思い出としてこれを自伝に書き込んだのだろうか。しかしこのような徳齡の「勝利」はやはり父の封建的権威によりもたらされたものであり、女子への抑圧そのものが改善されたわけでは決してない。



Kowtow 298 頁挿絵

『童年回憶録 (Kowtow)』は最後、絶対的権力者である西太后に仕えながらも、父の庇護により結婚を強制されることもなく、宮仕えを終え自由恋愛による結婚を成し遂げた徳齡の、亡き父への変わらぬ思慕の表明で結ばれる。19世紀から20世紀の、満漢の、東西の、男女の、「はざま」に立った徳齡のアイデンティティ・ポリティクスには様々な要素が絡まりあい複雑な様相を呈していたことをここまで確認してきたが、一方徳齡は、先進的（西洋的）価値観を持つ父に導かれ成長する自らの少女時代を自伝の中に再構築することで、西洋の読者に新旧の文明の交代、新しい中国の胎動をわかりやすく示そうとした。このような著述活動の原動力になったのは、女子であるがゆえに幼少期に受けた抑圧とそれによるアイデンティティの危機への抵抗意識だった。彼女が女性としての自由を求める時、そこには声を挙げるすべも持たない女性がいること、彼女が勝ち取った権利や自由は、結局は封建的男権によってもたらされたものであることに自伝の語り手はあるいは無自覚で

あったかもしれない。しかしそれでもなお、以下に引くような自由を求めた徳齡の語りは魅力と力強さに満ち溢れている。「わたしは壁が嫌いだ。壁の中に隔離されるのも嫌いだ。だからいつもわたしの翼を試したく思っている。中国の礼教の奴隷には絶対になりたくない。西洋の女性には全く信じられないだろうが、それは中国の女性を家の中に縛り付けるものなのだ⁴⁰⁾」。男性をも額づかせ、古い中国の「壁」を飛び越えた女性として自らを描出した徳齡の試みは、語る術を持たない女性を分断する危うさをはらんだものではあったが、「壁」の外でいかに自らを語るかの成功例となった。本稿では『童年回憶録 (Kowtow)』の表面的な分析にとどまったが、徳齡の後に続く華人女性作家の自伝との比較を含めた精読を次なる課題としたい。

注

- 1) “海外中国文学，一个根本的特征，往往是由女性担负起中国文化在海外的传承责任。不仅是母语文化，而且是文化母性的传统，“系母脐带”是中国文化在“离散”（Diaspora）状态中的主要维系方式” 虹影「故土、他郷与女性意識」『天南』第5期、天南雜誌社、2011年、88頁
- 2) ここで挙げられた女性作家の作品には邦訳されたものも少なくない。例えば、閔安琪（Anchee Min、アンチー・ミン）著、木原悦子訳『レッド・アザレア』集英社（1994年）、王屏（Ping Wang、ワン・ピン）著、中谷ハルナ訳『アメリカン・ビザ』角川書店（1996年）、鄭念著、篠原成子・吉本晋一郎訳『上海の長い夜』原書房（1988年）、張戎（ユン・チアン）著、土屋京子訳『ワイルド・スワン』講談社（1993年）など。ちなみに虹影はここで1950年代以降英国に居を移し英語で自伝的小説を発表した凌叔華については言及していない。虹影が凌叔華をモデルにした創作により遺族から提訴されたことが関係しているのだろうか、凌叔華のケースについても言及があれば「開祖」徳齡からの系譜がより明らかに示せたのではないだろうか。
- 3) 前掲1、89頁
- 4) 徳齡著作の邦訳書にはそれぞれ、訳者による紹介・解説がなされているが、それを除いて徳齡著作について単独で評を加えたものは以下の二点のみではないか。①白川知多「徳齡著『西太后秘話 - その恋と権勢の生涯』さねとうけいしゅう訳『天子 - 光緒帝悲話』永峰すみ・野田みどり訳（東方書店）」『中国研究月報』第469号（1987年）、②尾崎和子『「自伝・回想録を読む会」解題』『中国文芸研究会会報』第457

- 号 (2019年11月)
- 5) 徳齡の生年については諸説あり、1881年あるいは1886年とする研究者が多いが確証となる資料は存在しないようだ。一方、妹の容齡の生年は1882年で確定していることから、徳齡の生年を1881年とする説(虞文俊「自我想象与媒体建構下的徳齡公主」『湖北師範学院学报(哲学社会科学版)』、2009年02期)が有力である。
 - 6) “Der Ling's mother was Louisa Pearson, daughter of John Pearson, a Boston merchant working in Shanghai, and his Chinese wife.”, “Qing Dynasty princess impresses in English”, *CHINA DAILY*, 2018年5月22日
 - 7) “Among the titles conferred by Her Majesty, my sister and myself received the title of Chün Chu Hsien (Princess).” *Two Years in the Forbidden City*, New York : Moffat, Yard and Co., 1912, p377
 - 8) 初出とされる上海の英字紙 *International Review* は未見。漢訳「中国的皇太后：一個校正的評価」『辜鴻銘文集(上卷)』黄興濤等編訳、海南出版社、1996年、397-407頁を参照した。
 - 9) 徳菱著、佐藤知恭訳補『支那革命迷宮記』日東堂書店、1915年
 - 10) 徳齡の著作の全ては漢訳され、邦訳についてもほぼ全作なされている。また原著についても半数ほどがハーティトラストデジタルライブラリーで閲覧可能となっている。主な漢訳としては『秋海棠』の作者、秦瘦鷗による『御香縹緲錄 (*Imperial Incense*)』(1936年、『申報』副刊『春秋』に1934年より連載していたものを書籍化)、『瀛台泣血記 (*Son of Heaven*)』(1945年)がある。また、顧秋心は1940年代後半、上海交通大学在学中から徳齡著書の翻訳を始め、全著書を翻訳している。顧秋心訳は2012年に「徳齡公主文集」として中国人民大学出版社から再版されている。邦訳は以下のものがある。田中克己・太田七郎訳『西太后に侍して—紫禁城の二年 (*Two Years in the Forbidden City*)』(生活社、1942年・研文社、1997年)、井出潤一郎訳『素顔の西太后 (*Two Years in the Forbidden City*)』(抄訳、東方書店、1987年)、さねとうけいしゅう訳『西太后秘話—その恋と権勢の生涯 (*Old Buddha*)』(東方書店、1983年)、実藤恵秀訳『西太后絵巻 (*Imperial Incense*)』(大東出版社、1941年)、井関唯史訳『西太后汽車に乗る (*Imperial Incense*)』(抄訳、東方書店、1997年)、永峰すみ・野田みどり訳『天子—光緒帝悲話 (*Son of Heaven*)』(東方書店、1985年)。
 - 11) 徳齡を題材とした21世紀以降の作品には以下のものがある。徐小斌著『徳齡公主』(人民文学出版社、2004年)、テレビドラマ『徳齡公主』(韓鋼監督、徐小斌脚本、中国電影合作制片公司、2006年)、このほか1998年初演の香港話劇団『徳齡与慈禧』がある。なお、日本においても徳齡著作に基づくらしいノンフィクションが出版されている。渡辺みどり『西太后とフランス帰りの通訳』朝日新聞出版、2008年。
 - 12) テキスト分析にあたっては、原著の *Kowtow* (Dodd, Mead and Company, 1929、本稿ではハーティトラスト電子書籍を参照、URL: [https://hdl.handle.net/2027/uc1.\\$b53094](https://hdl.handle.net/2027/uc1.$b53094)) と顧秋心訳『童年回憶録』(上海百新書店、1948年初版、本稿では中国人民大学出版社、2012年再版を参照)を底本とした。なお、筆者注は〔 〕で示している。
 - 13) 訳者の一人である秦瘦鷗は、『瀛台泣血記』に序文「紹介原作者」を寄せ、徳齡が清朝皇族の血を引いていないこと、妹容齡の証言どおり西太后から特別に「郡主」に封じられたとしても「公主」とは大きな隔りがあり、よって“Princess”の訳語を自称に用いたことは「自高身分」であると指摘している。(珠海出版社、1994年版、1頁を参照) 後年、秦瘦鷗は徳齡の著作中の記述と歴史的事実の齟齬についてさらに丁寧な考証を加えている。(秦瘦鷗「『御香縹緲錄』中訳本及作者徳齡其人」『故宮博物院院刊』1982年)
 - 14) 虞文俊「自我想象与媒体建構下的徳齡公主」『湖北師範学院学报(哲学社会科学版)』、2009年02期、67頁
 - 15) 宋偉傑「既遠且近的目光——林語堂、徳齡公主、謝閣蘭的北京叙事」陳平原・王德威編『北京：都市想像与文化記憶』北京大学出版社、2005年、519-520頁
 - 16) J. O. P. Bland (1863-1945), E. Backhouse (1873-1944) *China under the Empress Dowager*, Philadelphia, J. B. Lippincott company, 1910
 - 17) Sarah Pike Conger, *Letters from China, with particular reference to the empress dowager and the women of China* Chicago, A.C. McClurg & Co., 1909
 - 18) Katharine A. Carl, *With the Empress dowager*, New York, The Century co., 1905

- 19) “In Der Ling’s writings, the binary oppositions between the Manchu and Chinese, between the civilized and the barbarian, are investigated through an intriguing view from near and afar, across the ambiguous boundaries of ethnicity, race, gender, language, and culture.”

Weijie Song, *Mapping Modern Beijing: Space, Emotion, Literary Topography* (English Edition), Oxford University Press, 2017, p182

20) *Kowtow*, p320

21) *Kowtow*, p77

22) *Kowtow*, p93

23) *Kowtow*, p95

24) *Kowtow*, p91

25) *Kowtow*, p20

26) 清末の纏足をめぐる動きについては第三章「足のディスコース」坂元ひろ子『中国民族主義の神話』169-175頁を参照した。

27) *Kowtow*, p290

28) *Two Years in the Forbidden City*, p17

29) 『素顔の西太后』41頁、なおこの写真は筆者の確認した1914年Moffat, Yard and Company版の原著には掲載されていなかった。

30) *Imperial Incense*, p9, 『西太后汽車に乗る』15頁

31) 陳礼栄「神秘的“徳齡公主”」『世紀』2000年3期

32) 「宝子年来坐，曰：“異哉，陸元鼎之為惠湘嘉道也。五月間已放裕朗西，豈其死耶？”因謂余：“君知裕朗西乎？”曰：“不知。”宝曰：“裕庚是也。（中略）其妻死，納都下妓鬼子六為妾，已乃逐其子婦与孫于外，以鬼子六為妻。鬼子六者，其父西人，流落死于上海，母乃粵妓，携六至都，名岷甚，裕取之。既至欄北，遇有教案，必遣格理之。鬼子六能英語，親詣教士閱說，事多得息，以故名籍甚。”」中国歴史博物館編『鄭孝胥日記 第一冊』中華書局（1993年）1895年7月14日部分、512頁。このほか「裕庚出身始末」『清代野記』にも、裕庚が洋妓を妾としたとの記述があり、「洋妓固有才，凡英、仏語言文字及外国音楽技芸皆能之」としている。張祖翼撰『近代史料筆記叢刊』中華書店、2007年、214頁。

33) *Kowtow*, p148

34) *Kowtow*, pp156-157

35) 引用にあたっては以下の漢訳を参照した。顧秋心、鄧偉霖訳『現世宝』中国人民大学出版社、2012年

36) 前掲131頁

37) *Kowtow*, pp35-36

38) 英アーサー・ウィング・ピネロ作の三幕構成メロドラマ。1888年3月から1890年1月までロンドン・テリーズシアターで上演された。私生児を産んだ女が、悔悛した男と結婚するという筋書きで、のちにオスカー・ワイルドが同作に着想を得た『つまらぬ女』を創作している。

39) *Kowtow*, pp298-300

40) *Kowtow*, p128

(本学言語教育センター外国語嘱託講師)